

フンザ、ゴジャールの文化地理ノート

月原敏博

大阪市立大学文学部

山間オアシス世界といえる調査地一帯に関して、その文化地理的観察の若干を記す。記述は断片的であり本稿は覚書に留まるが、さらに西方の山岳地帯をも視野にいれる際の足がかりの一つとしたい。

1. 水-山間オアシス-民族

1) 絶対条件としての水

インダス峡谷を經由して新疆へ至るKKH(カラーコラム・ハイウェイ)をたどり、ベシャム(Besham)という小さな町を過ぎると、峡谷の山肌の植生が激減し、もはや道ばたには乾燥に強いタイプの草が疎らに生えるのみとなった。平坦地もほとんどなく、地表の大部分は乾ききった土と岩ばかりの斜面である。

周囲に眼を凝らすと、濃密な緑の樹々や草地はいくらかないわけではない。だがそれは、きまってインダス川の河畔からはひどく上方の山の上である。河谷底に近いほど、暑く、しかもひどく乾燥していて、上方にいくらか緑があるといっても、それは、地形性降雨やわずかな雲霧帯の存在がきっかけ、例外的なものに見える¹⁾。

巨視的にいうと、8月のパキстанはインド亜大陸をおおう夏期の南西モンスーンの西端部にあたる。首都イスラマバード(Islamabad)からの沿道で蒸し暑い空気が滞っていたのも、そのためである。だがこの強力な季節風も、ここカラーコラム山域の中まではほとんど雨をもたらさない。前山で大部分の湿気が振り落とされる結果、カラーコラムの大部分は乾燥山岳地域となっているのである²⁾。つまり、車道の走るインダス川沿いの高度でいうかぎり、ベシャムのあたりには、夏のパキстан北部を乾湿二つの地域に分かつ境界があったことになる。

カラーコラムの景観から一目瞭然なのは、ここ

では、草木が生え、家畜が草を喰い、人が家屋を建て、畑で作物を育て、草や薪を採って暮らすところ、つまり、人間を含め、あらゆる生命の生きる場所は、水のあるオアシスに限られるということだ。地表の大部分をなす干からびた斜面は生命を拒絶しているといつてよく、水は、生存のための絶対条件にほかならない。

この性格のゆえに、山地水流を導く灌漑路の開設・増設こそが、カラーコラム地域で歴史的に最も重要な自然改変の一つであった。氷河を源とする比較的水量の豊富な山地支流を用いて小オアシスをつくってはじめて、規模ある人口の定着が可能となり、またその居住拡大を実現できたのである。水平に斜面を切った緑の筋が車窓から時折目にはいるが、これも灌漑路に水を得た草木をあらわしている。乾燥のゆえに天水農耕が不可能であり、唯一可能な耕作方式としての灌漑農耕も、水の絶対量と水路開設の地形条件に規定されている点で、個別オアシスも強い共通性をもつ。

従来この地域の景観像は「山間オアシス(ないしは山岳オアシス)」と要約されてきたが、浸食が深くてあまりに険しい乾いた谷間に、小規模な灌漑農耕の沃野が点在する意味で、まさしく適当な表現といえる。湿潤な東ヒマラヤ南面などの天水耕作・灌漑耕作混交地域だと「オアシス」とはとうていいえないし、また中央チベットなら「オアシス的」ではあるが地形的にはるかに広潤で「山間」の指す小規模性・凝集性はあたりにくい。だから、チベットとも様相を異にしている。既知

の場所でいえば、高山は少ないが低ラダックの景観に最も近い。

2) 民族と宗教の分布

水が重要な山間オアシス世界としてかなり共通した自然-生活基盤をもつカラーコラムではあるが、民族・文化の点では非常に多様である。現在ではまったくイスラーム教が支配的な地域であるが、歴史をひもとけば、ここには実に様々な民族・文化が流入してきた。

古代にはアケメネス朝ペルシアやアレクサンダーの東征の影響範囲にあったが、古くからインド文化の影響圏、特に、長らく仏教の盛んだった地域の一角としてあって、玄奘が通過したことでも知られている。だが、仏教勢力としては、ギルギット(Gilgit)～フンザ(Hunza)地区では、一時期チベット系バルティ人(Balti)の影響すら及んだことも確認されている。

しかも、ここ数百年のうちには、スィク(Sikh)、ドグラ(Dogra: ジャンムーの民族勢力)、英国人など、多くの「外国人」さえ支配者層に関わってきた(Hassnain 1978)。そのため、民族・文化的には実にさまざまなファクターが絡みあっていて複雑である。だが、ルート沿いに関していえば、以下のような民族分布を確認できよう。

アフガニスタンからパキスタン西北部にまたがって住むパターン人(Pathan、イラン語派パシュトー語話者)は、ベシャーワル(Peshawar)からアボッターバード(Abbottabad)、スワート(Swat)にかけての地域では住民をなし、ここ数世紀の間パキスタン北部の平原および低丘陵部一般ではもっとも優勢な民族としてあった。パターン人よりも先住の諸民族は、カラーコラム山岳地帯にモザイク状に分布する。

まず最初に出会うのが、チラス(Chilas)あたりまでのインダス川沿い山岳地帯に住むコーヒスターン人(Kohistani、インド語派ダルド(Dard)語群コーヒスターニー語話者)である。もともとスワートなども彼らの土地だったが、パターン人到来以後、山地部へと追いつけられてきたらしい。

次にギルギット周辺に至ると、そこには同じくダルド系だが異なる言語をもつシン人(Shinaki、ダルド語群シナー語話者)がいる。スンニー派が大

多数を占めるパキスタンだが、このギルギット周辺にはシーア派がある。シン人はシーア派であり、後述のナガル人を除けば、ギルギット周辺のシーア派はおおかたみなシン人であるといつてよいようである。

ギルギットからさらに北に進んだフンザーナガル地区には、ブルーシャスキー(Burushaski)語という系統不明の孤立言語を話し、ブルーショー(Burusho)とかフンザクート(Hunzakut)と呼ばれる住民が住む。彼らは数百年前からフンザ(Hunza)とナガル(NagarまたはNager)の2つの王国に分かれ、同一民族ながら、前者はフンザ川の北、後者はフンザ川の南を主な領域として対峙してきた。この対立は宗派対立でもあり、前者のフンザ人はイスマーイーリー(Ismaili)派、後者のナガル人(Nagari)はシーア派に属している。

フンザ川のさらに上流、すなわち調査村グルミット(Gulmit)を含むゴジャール地区(Gojar または Guhjar)には、フンザーナガル住民とはこれまた系列を異にするワーヒー人(Wakhi、イラン語派ワーヒー語話者)が住んでいる。彼らは、現アフガニスタン領のワーハーン(Wakhan)谷からここに入植した者の子孫であるといひ伝えるが、このゴジャール地区もフンザ王国の統治下にあった歴史をもつ。ワーヒー人は、ゴジャール地区のほか、イシュコマーン(Ishkoman)やチトラール(Chitral)の一部、アフガン領ワーハーン谷、そして旧ソ連領タジキスタンや中国領新疆自治区側にも分布しており、州境、国境を越えた広い居住域をもっている。

このように、われわれのルート上だけでも5つほどの民族地区を通るわけだが、さらに、ルートから少しはずれるだけでも、ギルギットからチトラールにかけて住むコー人(Kho、ダルド語群コワール語話者)、バルティスターン(Baltistan)のバルティ人(シナーチベット語族チベット語派バルティ語話者)など多くの民族が隣接しており、パキスタン北部の山岳地域は、少数民族地帯として、アッサムから雲南にかけての山岳地帯とも比肩しうる。ただし、バルティ人を除き、大部分の民族はインド-ヨーロッパ語族のインド-イラン語派、つまりアーリア系民族に属している。

多様な民族と複数のイスラーム宗派が重なりあう結果、この地域の民族文化地図は複雑な様相を



呈するが、聞き取りによれば、ギルギット～フンザ～ゴジャールにかけては、図1のように大勢をまとめうる。ギルギット周辺は、古くからこの地方の中心地域として機能しており、特に近年の近代化・都市化過程の中でも、周辺民族のここへの移住が加速化しているようである。

なお、ワーヒー人居住地であるゴジャール地区のなかにも、ミスガル(Misgar)などフンザ人からなる集落があるが、これらの集落は、ゴジャール地区がフンザ王国の統治下にあった長い時代に、ワーヒー人地区統治の戦略の一環として、フンザ人をいくつかの村に入植させた経緯によって生まれたと聞いた。

3) 作物帯と民族分布

民族と宗派の多様性は、自然条件のうえでは比較的似通った各オアシス群に個性を添えているが、自然条件とまったく無関係に民族分布があるのでもない。この点、農業地域区分の観点から一定の整理を試みることは無用ではない。

ギルギット周辺(標高約1500m)までは、一部には稲も育つらしいが、現在大部分の耕地はトウモロコシ畑であり、なかに、アルファルファの畑が混じっていた。冬(春)作は、主に小麦である。つまり稲作も可能ながら、夏にはトウモロコシ、冬には小麦という2毛作が行われる土地である。

フンザ～ナガルの村々(標高約1900～2300m)では、もはや稲は育たないらしいが、やはりトウモロコシの畑が多い。しかし、ソバ(甘ソバだけでなく苦いダッタンソバもある)の畑がみられ、ごく少ないがアワの畑もみられた。冬(春)にはやはり小麦がおもにつくられるらしい。トウモロコシの導入以前、特にこの地区には、麦類のほかに、

ソバ、アワ、キビなど、多様な雑穀があった(Muller-Stellrecht: 1979, 阪本(編): 1991)。これらは夏作で、第1作目たる小麦や大麦のあとに作られていたが、いまやこの雑穀がほとんどトウモロコシにとってかわられた具合らしい。

さらに進んでナジマバード村(Nazimabad、別名シシケット Sishket)以上のゴジャール地区(村々の標高約2400m以上)に入ると、もはや年2毛作はできず、夏に1作のみが可能な地域となる³⁾。グルミット村ではジャガイモ畑が半分位を占め、残りは小麦や大麦である。

こうした観察によると、ギルギットからゴジャールにかけての諸村落にも、巨視的には垂直的作物帯と呼ぶものも存在している。すなわち、主要民族との対応も併せて垂直的な農耕のゾーンを整理すれば、ギルギット周辺は稲もできる土地でシン人居住地、ナガルーフンザは稲はできないが2毛作が可能なブルーショール居住地、ゴジャールは年1毛作のワーヒー人居住地ということになり、それは図2のように要約できる。

このように、＜乾燥－山間－オアシス型農業＞という点での均質性と、モザイク状の錯綜した民族分布という一見不整合な事実にも、垂直的な農業生産区という観点からすれば一定の秩序性は存在している。つまり、山間オアシス型の農業といっても、細かくみればおよそ民族ごとに特定の作付け方式がある、あるいはあったとみなしうるのであって、ヒマラヤで見られるような民族のすみわけ現象が、ここでもある程度指摘できるということである。ただし、ここで述べた垂直的作物帯は、すべて灌漑農耕という枠内に留まるものであるとともに、河川勾配の緩さや乾燥の激しさによって、農業空間の布置としては垂直的にも水平

図2. ギルギット～ゴジャールの農耕のゾーンと主な住民

場 所	標高	農耕のゾーンと主な作物	主な住民(民族・言語と宗派)
ゴジャール	2400m以上	年1毛作(夏作のみ) ジャガイモ・大麦・小麦	ワーヒー人(イラン語派、イスマリーイー派)
フンザ～ナガル	1900～2300m	年2毛作(稲作不可) トウモロコシ・小麦・大麦・ソバ・雑穀	ブルーショール人(系統不明語、フンザ人はイスマリーイー派、ナガル人はシーア派)
ギルギット周辺部	1500m前後	年2毛作(稲作可) トウモロコシ・小麦	シン人(インド語派ダルド語群、シナー語、シーア派)

的にも断続的なものとしてある。だから、森林の開墾、とくにそこでの天水畑作によって、垂直的にも水平的にも連続的な農業空間を形成可能な湿润山岳地帯、たとえば東部ヒマラヤ南面での垂直的作物帯とは、かなり意味が異なるものではある。

2. フンザ、ゴジャールの現代

次に、ギルギット～フンザ～ゴジャール地区全般と、主たる調査村であったグルミット村について、その概況を順に記す。調査はごく短期間で不十分であり、以下の記述はあくまで断片的な覚書の範囲をでない。

1) KKH

1947年11月1日、ギルギット管区の軍人たちは蜂起し、スィク、ドグラ勢力を追い出してこの地域に独立をもたらしたが、15日後にはパキスタン側に帰属した。

フンザの王政は、その後も間接統治政策のもと存続したが、1974年に、プットー政権との対話によって終息した。しかし現在でも、ミール(Mir)あるいはタム(Thum)と呼ばれたフンザ王は、イスマーイーリー派宗主、アガー・ハーン(Aga Khan)のこの地域における代理人的地位にあり、王家は、徴税権などかつての権力は失ったとはいえ、フンザ、ゴジャールではやはり広大な土地と権威を持ち続けている。

この1970年代前半頃より、この地域の現況を形成する上で重要な変化が生じる。それにはとりわけ、中国援助によるKKH(カラーコラム・ハイウェイ)の開通をあげなければならない。

インダス峡谷沿いの本格的な工事は1968年に始まり、1972年にはフンジャラブ(Khunjerab)峠越えの中国側道路が開通した。以後、工事の最難関であったグルミット以南にも多大な中国人労働者の投入がなされ、1979年12月に全面開通をみた。開通後ほとんどの中国人は帰国したが、現在でも、カリマバード(Karimabad)の近くには補修用の人員をおいた中国人キャンプが見られる。

道路開通により、人畜に頼った細々とした輸送しかありえなかった急峻な峡谷地帯にもモータリゼーションが到来し、それに伴うさまざまな変化

も生じた。

KKHはトラック輸送による中パ貿易の幹線路として発達し、現在、この地域は豊富な中国産物資のパキスタン国内への出荷港となっている。また、たとえば新疆から大量の家畜を購入するなど、この地域の住民が国境貿易に直接関与することもあれば、国境に関わる政府関係施設への地元出身者の雇用機会なども増大しており、国境貿易の関連で住民が得ている利益にはかなりのものがある。

しかも、1986年にはKKHが国際的な旅行ルートとして開放され、それ以後大量の外国人ツーリストを通過させることとなった。地元ではそれまで、外国人との関わりは、中国人を除き、登山・トレッキングのためのキャラバンに人力・畜力を提供するという程度のものでしかなかったが、バスで移動して高級ホテルでの滞在を好む観光客とも、接する機会を得たわけである。

2) AKRSP

さてもう一つこの地域の近代化において特筆すべきことは、アガ・ハーン財団(the Aga Khan Foundation)の諸機関、すなわちAKES(the Aga Khan Education Services)、AKHS(the Aga Khan Health Services)、AKRSP(the Aga Khan Rural Support Programme)などによる活動である。現在、かつての Gilgit Agency たる北方地域(Northern Areas)はパキスタン連邦政府管轄下にあるが、同財団は、その地方政府にはるかにうまわる経済開発・近代化の活動を行っている。

なかでもAKRSPは、ほんの10年ほど前(1982年12月)にギルギットを拠点に現地活動を開始したものながら、急速に活動を広めた。それまでの世界各地の援助・開発方法の反省の上にたった、農村重視、特にその自助努力を重視する方針を採用して、灌漑路の設置・維持管理、作物・家畜の品種改良と新種供給、化学肥料の供給と在来肥料の良好な加工方法の研究開発、商品作物の栽培・加工技術の教育、植林技術の研究と苗木の分配、女性労働力への新技術の教育など、農林業開発に関して実に多岐にわたる活動を行っており、外国人を含め、トレーニングを積んだ専門家もギルギットの本部を拠点として多く働いている(AKRSP

1992, Khan & Khan 1992)。

その活動の基本はボランティア・ワークであり、村落(ないしは村内集落)ごとに Village Organization が組織され、各村での活動は、おもにそのメンバーたちの自発的労働によって行うことを基本としている。財源は、これら地元のメンバーから一定の寄付を集めて活動資金としているが、先進国のイスマリー派信徒から寄せられる資金も少なくないようである。

ギルギット地区を管轄するこの本部は、ギルギット(Gilgit)周辺からフンザ(Hunza)、ナガル(Nagar)、ゴジャール(Gojal)、イシュコマン(Ishkoman)、グピス(Gupis)、ヤスィーン(Yasin)、プニャール(Punyal)、シカンダラバード(Sikandarabad)、ジャグロート(Juglote)で活動を展開しているが⁴⁾、バルティスターン、チトラール両地方にも地方支部があり、AKRSPの活動領域は、パキスタンの北方地域全域とチトラールに及んでいる。しかもその恩恵を受ける集団がイスマリー派という宗派のみに限られていない点も注目され、これら諸機関の活動は、北方地域の住民にとって非常に身近なものとなっている。

3. グルミット村の生活景観

1) 村の概要

さて、主たる調査村であったグルミットであるが、この村は、フンザ川の上流部に当たるゴジャール地区の中心といってよい村である。

他の村々と同じく、フンザ川本流の水は利用してはならず、懸垂氷河(シャトゥーバル氷河)から流れ落ちる水流がつくった、傾斜のきつい小扇状地に位置する。高度計の読みで標高2400m程度のフンザ川の川べり近くをKKHが走っており、そのあたりから最上部のカマリス集落(同、2800m程度)まで、畑と家、アンズの木々などが散在して続き、全体が一つの山間小オアシスをなしている。

現在、グルミットには約250戸の家があり、人口は約2000人(1戸あたり平均8人)とのことである(別の聞き取りでは2500人)。家々と耕地は連続的に散らばるが、村内は、グルミット(Gulmit)、チャマンガール(Chammangul)、カマリス(Kamaris)の3集落に分かれており、AKRSPの

Village Organizationにもこの3つがある。

村内には高等学校までの4つの学校、7つのツーリスト用ホテル、5つのモスク(この地域ではモスクとは呼ばれず、ジャマートハーナーと呼ばれる)、銀行、ヘルスセンター、離宮跡、ボログラウンドなどがある。普段は開店していないものも多いが、雑貨や食料品を売る商店の数は数十に上るようであり、古くには官制のマーケットがあったのではないかと思われた。近年の生活の変化は急であり、1979年にUNICEFの援助によって各戸に水道がつき、1987年にはハイバル(Khaibar)の発電所から電気がもたらされるようになった。住民特に青壮年の男性の仕事は、農業以外も多いように見受けられた。

2) 文化・社会的背景

既述のとおり、住民はワーヒー人であるが、彼らはペルシア文化圏の民であるといってよい。言語はペルシア語の方言であり、フンザ人の言語であるブルーシャスキー語は話せない人も多い。特にエリート層は、詩情性に富むペルシア文学に通じ、イスラーム暦(ヘジュラ暦)ではないペルシア暦も用いている。ペルシアの暦は古くから中国の十二支を取り入れているため、日本とほぼおなじ干支がここでも通じる⁵⁾。

住民は、水路(ウォーズ)をつくった者に従う4つの男系家系(クトール)から構成される。ロライマ(Lorimer 1934: 142)も記録したように、ボリ・クトール(Bori Kutor)、ブドゥレ・クトール(Budle Kutor)、ルズドール・クトール(Ruzdor Kutor)、チャルシャンビ・クトール(Charshambi Kutor)の4つである。グルミットはフンザ王の夏の離宮があったところであり、4つの家系以外には、この王(フンザ・ミール)の家系があるのみで、そのほかに村内に居住するのは、外部から使用人として雇われて滞在している者がある程度である。

住民によれば、グルミットにおけるフンザ王の支配は900年前までも遡るが、最初の水路が造られたのはそれよりも前のことだったという。村の最初の入植者は、ボリ・クトールの者であった。

なお、クトールは外婚単位ではないと同時に内婚集団でもなく、おなじクトールであるか否かは婚姻に際して特に問題とはならない。また、たと

え同じイスマリー派信者であるといっても、異民族であるフンザ人との間の通婚はほとんどないようである。クトールの歴史については、村人はよく知っているようであり、ある村人は、自分の属するクトールの歴代の先祖について、8代15人を直ちに教えてくれた。今回の調査ではよくわからなかったが、水利権などとの絡みもあって、家系のもつ社会的な意義は小さくないようである。

3) 村の領域

村の領域は、上述のオアシスよりもかなり広いが、オアシスの周囲の大部分は不毛の斜面である。下からはあまり見えないが、山上に樹林と草地があり、そこは、夏の放牧や材木採りに、特に男たちが訪れる場所である。また冬季には、野生動物が比較的低所に降りてくるのでハンティングにも出かけるという。転落してけがをすることも珍しくないらしいが、確かにそれと納得せざるをえない非常な急傾斜の岩とガレばかりである。このほか、山上には岩塩の採れる場所もあり、また村人が茶のかわりの飲料とする高山植物もあって、経済的には重要な土地となっている。

村から南方の山の上に見えるガウーシュという草地について、3年ほど前から対岸の隣村ナジマバード(シシケット)との間に争いが起こっている。既述のように、ゴジャール地区にはフンザ人の入植地が何カ所もあるが、ナジマバードはのもっとも最近のものであり、今世紀初め頃のフンザ王で灌漑路開設の名手として知られた Muhammad Nazim Khan が、かつては不毛な土地であったシシケットという場所を沃野にかえ、フンザ人を入植させてできた村なのである。

争いは、その草地の夏の放牧権についてである。KKHができた影響もあって、ここ20年ほどの間にグルミット村の家畜数は激減しているが、それでもなお20頭以上のヤギ・ヒツジをもつ世帯は少なくない。そして、いまでも100頭以上持つ5世帯ほどが、他の世帯のヤギ・ヒツジをも群れに含め、夏放牧に上がるのである。このため、問題は直接放牧に携わる少数の世帯だけのものに留まらず、旧来の既得権をめぐるの、村同士の争いになっているらしい。

さらにつけ加えておけば、このガウーシュという草地に隣接する別の草地について、近年までナジマバード村とガネーシュ村との間で争いがあったという。こちらはすでに3年前に決着がついたとのことだが、このことから、新村ナジマバード村は、村の上方にある草地の使用権について、フンザ川の下流側の村とも上流側の村とも争ってきたことになる。古くからの使用権を保とうとするグルミットもガネーシュも、位置としてはフンザ川の対岸の村であるが、地形的にはこの草地の直下ともいえるフンザ川沿いの場所に新村が作られたがゆえに、困難な争いが生じたと想像できる。

4) 畑・植林地・採草地

村人よれば、オアシス内の家屋や道・水路以外の土地は、4つに大別しうる。畑(ウンドゥル)、植林地(ボーゴホ)、採草地(ジンガール)、荒地地(ダシュト)がそれである。

これらのうち、対照的なのは畑と荒地地である。畑は毎年作物を栽培している耕地であり、それ以外の土地では作物はつくられない。水力を用いた粉引き小屋(ホドールグ)やトラクターと同じく、畑は私有であり、石囲い(ヴィーズ)で囲われている。だが、荒地地は共有地であって、特に石囲いはない。ところによってはいくらか草があって家畜が放されることもあるにはあるが、そこは、扇状地上の旧河道など、ほとんど役に立たない不毛の土地である。

次に植林地と採草地についていえば、植林地はポプラや柳が人為的に植えられた所で、これらの高木が密集しているが、採草地は毎年生えてくる野草が刈られる場所であり、そこには高木はみられない。この乾燥山間オアシスでは、水あってこそ動植物の生きられる空間が生まれるのであって、ポプラ、柳、アンズなどの樹々は、すべて人間の手になる植林地だといってよく、また、草を採る採草地も、灌漑によってはじめて創り出すことができる。そのため、植林地・採草地ともに、用途は違っても、あたかも耕地のごとき性格をもった私有地であり、畑と同じように石囲いで囲まれている。

ところで、植林地と採草地の区別は、はじめて見る者には少し難しい。植林地でも、ところによ

って樹々に疎密があるということだけではなく、植林地でも採草地でも、木化して1 m以上のこんもりしたしげみとなるザッハという刺のある植物⁷⁾が一般に見られるからである。採草地の中には、その木化した繁みが非常に多くてほとんど採草地全体を覆っており、一見したところとうてい採草地には見えないようなものまである。

無用なものに見えるこの植物は、道沿いや畑のわきにも少なくない。そこで、なぜ植林地や採草地の中にこれほど多く、村人がどうしてこれの繁茂を放っておくのかと非常に疑問に思ったので、実際このような採草地で頑丈な皮手袋で手をまもりながら草採り作業をする住民の所へ、刺に刺されつつも近づいて聞いてみたところ、たいへん意外な答が返ってきた。

住民によると、ザッハは切れば切るほどさらに余計に生えてくるのでやっかいなうえに、切ってしまうと肝心の草がなくなってしまうという。住民は、オアシス内に生えるあらゆる草を識別しており、家畜が食べられる飼料(ウーシュ)たりうるか否かをよく心得ているが、好まれる種類はイネ科の長い草であり、これの確保はとりわけ採草地に依存している。だが、ザッハがないと、こうした良好な草が採草地でもなくなるらしいのである。どうやらザッハは、表土が乾燥するのを防いでいるらしい。

加えて重要なのは、ザッハが特に冬季の重要な燃料になること、家畜の侵入を防ぐための簡単な囲いに使えること、大麦・小麦の播種後に使う簡単な耙をつくる材料になることなどである。何の役にも立たないような植物が、意外にも非常に重要な役割を果たしていたのである。

このザッハが示すのは、山間オアシス内での植物と植物、そして植物と人間との興味深い関係である。ポプラやアンズなどの樹々は、いわば人間の側がラブ・コールを送って、植林などによって積極的に配置・育成されるのに対し、ザッハはいわば招かれざる客であり、いくらかでも水気のあるところなら勝手に生えてくる。だが、半ば嫌われもののこの植物も、あるところでは家畜飼養に不可欠な種類の草の生育を助けているし、また種々の用途において人間生活にも組み込まれて役立っている。もしこれがなければ、生活様式にも

少なからぬ影響が出るはずである。

山上で岩塩や茶の代用植物が得られることとあわせ、カラーコラムの山間オアシス生活の自給性が、こうした植物の役割にも見られることに注意しておきたい。

5) 耕作様式とその変化

最初に述べたように、グルミット村の位置するゴジャール地区は1毛作帯に属し、ジャガイモや小麦を主作物とする農業が行われている。

村人によれば、土地の生産力は小麦・大麦の播種量を基準として収穫量が何倍かで表現される。一般に、良地(ナハトズイミン)では7~8倍、普通地(ダルミアナ)では4~5倍、悪地(シャクトズイミン)では2~3倍程度の収穫がえられる。

伝統的には、村内の耕地を3分し、それぞれで、大麦(ユルク)、小麦(ギッディム)、そしてヴァクラと呼ばれるマメを順繰りに夏作物としてつくる3年サイクルの輪作システムをもっていたという⁸⁾。

現在、耕地の半分以上を占めているジャガイモは、FAOの推進によって比較的近年に増え、3者のうち特にヴァクラにとってかわった。また同時に、大麦に対して相対的に小麦の作付けが増えた結果、現在は、小麦とジャガイモを年々交互に作付けする2年サイクルの耕地が主となってきたとのことである。

農事暦の聞き取りによれば、播種及び犁耕作業は、大麦・小麦については3月10日頃、ジャガイモ・ヴァクラについては4月15日頃に始まる。収穫は、大麦は7月、小麦は8月であり、ヴァクラは9月初め、ジャガイモは9月半ば頃からである。

大麦・小麦に関しては、他の乾燥-半乾燥地域の麦作地帯と同じく播種期の作業が重要で、その伝統的な手順は次のとおりである。まず播種前に一度畑に水をいれて土を湿らして堆肥(ダルド)をまいておく。何日か経た後、種子を投げ播きしてから犁(スプンドゥル)をかけ、さらに上述のザッハを用いてつくった簡単な耙(ラモールズク)をかけて地面をならす。一週間ほどしたら灌漑用の小うね(ラーグ)をつくり、最初の灌漑(テベッチ)をおこなう。その翌週、第2回目の灌漑(プティッチ)を行う。以後の灌漑は単にユブク(水)と呼ばれ、

土の湿り気を見ながら、3、4日から1週間くらいごとに行う。畑が砂の多い土(リヴォルチ)の場合、収穫までの灌漑回数は合計10~15回程度となるのに対し、湿り気の多い土(セゲーズ)の場合は、合計8~10回ほどですむ。

肥料にはウシ・ヤギ・ヒツジのなどあらゆる人畜の糞を使うが、畑のうちでも特に野菜をつくる菜園では、強力であると考えられているヤギ・ヒツジの糞(ベシユク)と子ヤギ・子ヒツジの糞(クシツチ)が多用されるという。

筆者自身は、高度と乾燥度において類似の気候条件にある麦作地帯としては、カラーコラムに比較的近いラダックを訪れた経験があるだけだが、ロライマの記述したフンザの農耕技術(Muller-Stellrecht 1979:28-37)などを勘案しても、マメ類との輪作、散播と犁耕の順序、耙の簡単な点などで、この地域の耕作方式は、特に低ラダックのそれとよく似ている。また、畑の中に带状に小うねをつくって灌漑する方法は、雲南西北部、瀾滄江沿いの古水(2300m)や金沙江沿いの奔子欄(2100m)を含め、東南チベットから中央・西チベットの谷あいの灌漑農耕に、一般的に通じるものである。

6) 動力の近代化と家畜

滞在した時期は、ちょうど大麦・小麦・アンズなどの収穫期であった。大麦・小麦は、鎌を使って根元近くを刈るが、鎌の切れあじが悪いとか、土の付いた根もそのまま引き抜かれてくっついていが多い。刈り取られた麦わらは、そのままいったん畑全体に放置されるが、さらにひと一人で担げるほどの量で畑の中何カ所かに束ねられて何日か乾かされる。十分乾いた後は畑の中の一カ所に積み上げられ、脱穀されるのを待つ。

脱穀にはトラクターの動力を使っていた。1984年頃に最初の導入者が現れて以来、トラクターが犁耕・脱穀の主役になってきており、ウシを用いた犁耕・脱穀は、近年かなり少なくなっただけ。このトラクターはパンジャブ(ラーホール)製で、現在村全体で4台を数える。シーズン中のこととて、朝から夕方までトラクターはあちらこちらを順番に回っており、トラクターのたてる大きな音と麦わらの煙がその場所を示していた。脱穀の終わった麦わらは、これもトラクターの力を使

ってその場で短く切られ、飼料(ウーシュ)としてサイロ(ウーシュドゥーン)に運ばれていた。

KKHの開通とモータリゼーションの波及、農業用トラクターの導入によって変化したことの一つは、一般輸送・乗用として、あるいは犁耕・牛蹄脱穀などの農用畜力としての機能が、家畜に求められなくなったことである。この意味での家畜飼養は、ここ20年ほどの間に急速に衰退してきた。

現在、多くの世帯は数頭のウシと十数頭から数十頭のヤギ・ヒツジをもち、ウシは年中家の近くにおき、ヤギ・ヒツジは夏季に牧夫に預けて飼養している⁹⁾。家畜飼養の目的は、ウシ・ヤギ・ヒツジすべてからの自家消費用の搾乳と肉利用、ヤギ・ヒツジからとれる毛の利用、肥料としての家畜の糞の利用といったあたりに集中している。

かつては、ウマをもつほかヤギ・ヒツジを100頭内外もつ世帯は非常に多かったようだが、現在は、村の中にウマはまったくなく、ロバも村全体で2頭しかない。ギルギット周辺のポロは歴史的に有名だが、住民の記憶によれば、村のポログラウンドで最後に行われたポロゲームは1979年頃のことであるから、近年急速にウマがなくなったことになる。ここでも、伝統に反するような家畜種構成の変化があったといえる。

KKHの開通に関わる変化の例をもう一つつけ加えれば、伝統的に使っていた鎌や犁先は、フンザ人の集落にすむ特定の下層カースト(鍛冶及び楽器演奏のカースト)が作ったものだったのだが、近年は、パンジャブ製品のみならず中国製品までも入ってきている。KKHは、鉄製品の自給的確保のシステムにも影響してきたといえる。

4. チベット・ヒマラヤからの若干の展望

さて、以上雑多な記述を並べてきたが、とりわけグルミット村に関しては、本稿の内容は村の概況の覚書に留まる。しかも既述のように、ギルギットからゴジャールまでの狭い範囲だけでも3つの農業地区・民族地区があるが、グルミット村は、そのうちの1地区に属すのみで、他の2地区を含めて3地区間の差異・共通性を摘出したり、またその中でグルミット村の位置づけをはかることは、将来の課題とせざるを得ない。そこで、稿を閉じるにあたり、筆者自身に、この地域が全体と

してどのように見えたかという点を若干述べて、今後の研究視点を探る端緒にしたい¹⁰⁾。

生業—生活空間の構成からいえば、この地域の住民にとって重要な空間は、2つの極にあるといえる。一つは耕地と家屋の集中する谷底近くのオアシスであり、もう一つは、山上の草地と森林である。前者は、人間がつくりあげた空間であるのに対し、後者はいわば、地形性降雨や雲霧帯の存在によって形成・維持されている自然の緑地である。しかもこの2つの極は、乾いた不毛のガレと斜面という、利用しがたい土地によって互いに遠く隔てられている。

この乾燥した不毛の土地の存在ゆえに、氷河から供給される水に潤される谷底近くのオアシスは、その外部とは対照的な生存空間となっているが、険しい地形によって水路開設の可能性が限られるため、この生存空間は狭小で孤立的でもある。

ザッハという植物が示す、オアシス内の動物—植物—人間の間の複雑な相互依存関係や、クロイツマン(Kreutschmann 1987;1988;1990;1993)なども指摘しているような水利をめぐる社会関係を理解するためには、こうした孤立的生存空間としてのオアシスの性格、そしてそれを生む水の絶対性を無視できない。

だが、だからといって、この地域の住民の生活は、決して山上の土地を欠いてはありえない。牧畜産物や森林産物などは、この緑地に大きく依存しており、伝統的経済において、この山上の土地とオアシスとが密接に結び付けられていたものでなければ、放牧地の使用権についての、新村ナジマバードと他村の争いも生じ得ないはずであろう。

トラクターや自動車という動力、外来の鉄製農具などの導入をもたらしたKKHの開通は、さまざまな側面においてこの地域が伝統的にもっていた自給的システムを変容させてきていると評価せざるを得ないが、伝統的経済においては、山上の緑地は畜産のみならず農耕用ならびに輸送用としての畜力の源でもあったといえ、その生業経済全体に持つ意義は、今よりも大きかったはずである。

このように、谷底のオアシスと山上の緑地は、家畜などを媒介項とする人間の営為によって相互連関関係をもたされておられ、これを「2極連結構造」とでも呼ぶことができるが、オアシスの水も

元を辿れば山上で涵養される氷河に依存しているのであり、上方の土地への降水なしにはオアシス空間も成立しない。だから、人間の関与によって成立しえた「2極連結構造」も、最終的には「山上の降水」に依存しているといえる。

このような生業—生活空間の構造的性は、東南チベットの横断山脈地域から中央チベット、ラダックなどへかけての、乾燥—半乾燥山岳地域と基本的に同質のもので、山上に給水源としての氷河や森林、そして夏放牧のための草地があり、一方農業が谷あいでは灌漑によってのみ成立しうる諸地域には、普遍的に見られるといつてよい。中央チベットでは主村の標高が高く、上方にはもはや森林もなく条件設定としては若干異なるが、それでも生業—生活空間の基本構造は同じである。既述のとおり、農耕技術にもその顕著な類似性が見られる。こうした意味で、カラーコラムの山間オアシス地帯も、ヒマラヤ—チベットの乾燥—半乾燥地帯と類似する生活空間構成をもつ。

そして、カラーコラムよりもさらに西方の低山岳地域を視野にいれると、そこには、乾燥という点ではある程度類似しながらも、カラーコラム以东との大きな違いを見いださう。

カラーコラム、ヒンズークシュよりも西方では、一般的に乾燥度が高くなるとともに、山も低いがゆえに「山上の降水」は少なく、山上の緑は薄い。しかも、水の供給源たりうる氷河も、ヒマラヤやカラーコラムよりもはるかに小さいか、あるいはまったく存在しないところが多い。土地利用の点では、山上の水に依存しているとはいえ数十キロの長さにも及ぶ水路（カナート）による灌漑耕作や、わずかな天水をも耕作に利用する乾燥農法（Dry Farming）などを、その地理的理解の上で欠くことはできない。

つまり、カラーコラム地域には、限定された規模ではあっても氷河の水や森林を活用できる意味で、むしろより湿潤でさほどオアシス的ではないヒマラヤ地域（例えばその南面高地）などとの連続性を見ることができる。

しかも注意を要すべきことは、パキスタン以西は地中海性気候区に連なる冬雨地帯に属し、パキスタン以东の夏雨型アジア・モンスーン地帯とは、その乾湿において時季的に180度のずれがあ

り、温量の点で植物生育に適するはずの夏季に乾燥という障害に出くわす反面、低温という点で不適期の冬季に湿潤という条件を得るものとなる。この降雨の季節的対照性への配慮なしに、例えば中央チベットの耕作限界があれば高いことなども、適切には評価し得ないはずである。

こうして東西の変異傾向を想起すれば、グルミット村をはじめとするカラーコラムの例を、さまざまな意味で西南アジアの低山岳地域とヒマラヤチベットの漸移型として評価しうる視点を見いだしうるが、それについては稿を改めて論じていくことにしたい。

注

- 1) この緑地は、河谷底よりも多くの降水量を受けている結果、森林や草地となっているもので、同様のメカニズムは、水の供給源たる氷河も、その高所で多くの降雪があることによって涵養されることにも当てはまる。後述するように、この山上の緑は、住民の生活上重要であり、決して無視はできない。

Allan(1990: 401)によれば、フンザ地区の場合、この山上の森林は、上方は標高3800m、下方では標高2700mを限界とする帯状の分布を示すが、そこは、2200m程度の集落高度からすればかなり上方である。なお、この森林限界は、上方では寒冷に対し、下方では乾燥に対する限界として存在している。

- 2) 訪問時のカラーコラムのオアシスは、非常に暑く、乾燥していた。以下、その経験について記す。

8月12日、アボッターバードからギルギットへ移動した行程の中で経験した当日の最高気温は、なんと夜10時のチャラス(Chilas)での気温であり、36℃であった。前山を越えた気塊がフーン現象を起こしていると考えられた。

ギルギット(標高約1500m)では、深夜でも屋内だと日中熱せられた建物が発熱して暑く、涼しい戸外にくらべて温室のごとく、旋風機の風もかえって暑く感じほどであった。小便の回数が一日2回ほどに減り、しかもその量が非常に少なくかつ濃厚なのに気づいて水を一日4~5リットル飲むようにしてもさほど変化がなく、おそるべく多量の水分が皮膚からでていたとしか考えられない。冬のギルギットは酷寒の地らしいが、とにかく強烈な暑さであった。

だが、この暑さも、フンザ、ゴジャールへと上るに従って、非常にしのぎやすいものにかわった。

- 3) ただし、グルミット村(2400m)の例では、実りを期待せず、飼料として稗を得る目的で第2作にトウモロコシなどをつくることがある。

- 4) AKRSP発行の資料(AKRSP 1992: xxi, 8)によれば、この範囲のギルギット地区(面積: 28,500平方キロ、人口: 277,000人)を構成する約500集落、29,600戸のうち、494集落、26,500戸が、AKRSPのメンバーと

なっている。本稿に関わる各地区の集落数(Village Organizationの数)と戸数(メンバー世帯数)は、それぞれ、Gojal: 34集落 1763戸、Hunza: 59集落 3407戸、Nagar: 35集落 1959戸、Gilgit: 79集落 4296戸という数値があげられている。

この地方は山間オアシスの世界として、自給性の強かった過去ほど、各オアシスの面積がそこでの可容人口を強く規定していたはずである。そこで、現代の正確な調査による各村の面積(Irrigated Area)と人口のデータを得たかったが、帰路、ギルギットで戒厳令がしかれたことなどもあって、今回その情報は得られなかった。

- 5) ギルギット周辺のシン人たちは、この干支の概念を知らないことが確からしいが、フンザ人には、一部知っている者もあるようである。フンザの「長寿伝説」もあるが、少なくともグルミット村では、成人の過半は、自分が何年(なにどし)うまれか知っていたので、チベット文化圏での調査例と同じように、聞き取り年齢の不正確さはこれによってある程度は正しうするはずである。
- 6) こうした山上の土地、とくに草地や森林の存在のもつ経済的意義は、ギルギットからゴジャールにかけての村々に一般的にあてはまる。この点については再び本文でふれる。
- 7) この植物は、チベット語圏でツェマとかツェルマンと呼ばれ、実が薬用資源にも用いられている植物と、類似のものであろう(Jaschkeの辞書に従えば、それは *Hippophae rhamnoides* である)。
- 8) かつて3分されていたという耕地が、いかなる耕作強制をもって維持・運営されていたかを確認はできなかったが、この種の輪作および畜農業経営の共同体的規制としての三圃制の存在が報告されている例は、アフガニスタンの山岳地帯、インド・ヒマラヤやネパール・ヒマラヤなどから少なからずあり、なんらかの共通した文化層の存在を示すものかとも考えられる(Rathjens et al eds. 1973; Grotzbach 1970)。
- 9) ヤクについて述べると、ヤクおよびヤクウシ雑種のゾ(ワーヒー語ではゾーホ)は、グルミットよりも上流のSost, Gircha, Imamabad, Morkhun, Shimshar, Misgarなどの村々の住民が飼っている。夏の主たる放牧場所は、シムシャル峠、フンジャラ峠などの方面である。
- 10) これまで筆者の見てきたところは、おおよそ、チベット系住民=チベット文化圏を主とし、地域の自然条件としては、冷温帯でかつ湿潤なヒマラヤ南面の2000m程度以上から、高冷地で乾燥したヒマラヤ北面のチベット高原を中心としてきた。

ところが、今回訪れた地域は、民族=文化圏としては、ほぼ、アーリア系民族=イスラーム文化圏であり、かつ、自然条件としては、これまで訪れた地域のなかでもっとも乾燥が激しく、しかも集落高度としては1000から2600m程度の中高度域を中心としていた。このため、今回はほぼ完全に民族=文化圏を越えるとともに、地域の自然条件の上でも、<低地乾

燥>という新たな範域へ大きく踏み込んだわけである。

これによって、<高地↔低地>、<乾燥↔湿潤>という2つの比較軸が全面的に絡み、<高地湿潤>を中心としたこれまでの発想、すなわち<高地湿潤↔高地乾燥>や<高地湿潤↔低地湿潤>という変異・対照関係ではなく、<低地乾燥↔高地乾燥>とか<低地乾燥↔低地湿潤>といった、<低地乾燥>を中心とする変異・対照関係を視野に入れざるをえなくなった。

もちろん、民族=文化圏についても、必ずしもヒマラヤのように<チベット文化↔ヒンドゥー文化>ではない<チベット系民族↔アーリア系民族>の対比、すなわち、<チベット文化↔イスラーム文化>ないしは<チベット文化↔ペルシア文化>という対比を考えざるをえない段階に至ったといえる。

参考文献

- 小西正捷(編)(1987)『もっと知りたいパキスタン』弘文堂。
- 阪本寧男(編)(1991)『インド亜大陸の雑穀農牧文化』学会出版センター。
- AKRSP (1992) The Aga Khan Support Programme Ninth Annual Review 1991, AKRSP, Gilgit.
- Allan, Nigel J. R. (1989) Kashgar to Islamabad : The Impact of the Karakorum Highway on Mountain Society and Habitat, *Scottish Geographical Magazine*, 105:130-141.
- Allan, Nigel J. R. (1990) Household Food Supply in Hunza Valley, Pakistan, *Geographical Review*, 80(4):399-415.
- Byerlee, Delek and Tariq Husain (1992) Farming Systems of Pakistan, Vanguard Books, Lahore.
- Drew, Frederic (1875) The Jummoo and Kashmir Territories, reprint 1980 by Indus Publications, Karachi.
- Grötzbach, Erwin (1970) Formen des zeltgebundenen Feldbaus und dessen Auflösungserscheinungen im Hindukusch (Nordost-Afghanistan), *Die Erde*, 1970(1):23-40.
- Hassnain, F.M. (1978) Gilgit : The Northern Gate of India, Sterling Publishers, New Delhi.
- Hewitt, Farida (1989) Women's Work, Women's Place :The Gendered Life-World of a High Mountain Community in Northern Pakistan, *Mountain Research and Development*, 9(4):335-352.
- Khan, Mahmood Hasan and Shoaib Sultan Khan (1992) Rural Change in the Third World : Pakistan and the Aga Khan Rural Support Program, Greenwood Press, Westport.
- Knight, E.F. (1893) Where Three Empires Meet :A Narrative of Recent Travel in Kashmir, Western Tibet, Gilgit, and the Adjoining Countries, reprint 1991 by The London Book Co., Islamabad.
- Kreutzmann, Hermann J. (1987) Die Talschaft Hunza (Northern Areas of Pakistan) : Wandel der Austauschbeziehungen unter Einfluss des Karakoram Highway, *Die Erde* 118:37-53.
- Kreutzmann, Hermann J. (1988) Oases of the Karakorum : Evolution of Irrigation and Social Organization in Hunza, North Pakistan, in Allan, N. J. R. et.al eds., "Human Impact on Mountains", Rowman & Littlefield, Totowa, New Jersey, pp.243-254.
- Kreutzmann, Hermann J. (1990) Oasenbewässerung im Karakorum :Autochthone Techniken und Exogene Überprägung in der Hochgebirgswirtschaft Nordpakistans, *Erdkunde* 44:10-23.
- Kreutzmann, Hermann J. (1993) Challenge and Response in the Karakorum :Socioeconomic Transformation in Hunza, Northern Areas, Pakistan, *Mountain Research and Development* 13(1):19-39.
- Leitner, G.W. (1889) The Hunza and Nagyr Handbook, 2nd Edition, reprint 1985 by Indus Publications, Karachi.
- Lorimer, D.L.R. (1934) Folk Tales from Hunza, reprint 1987 by Lok Virsa Publishing House, Islamabad.
- Lorimer, E.O. (1938) Language Hunting in the Karakorum, reprint 1989 by Indus Publications, Karachi.
- Müller-Stellrecht, Irmtraud (1979) Materialien zur Ethnographie Dardistan (Pakistan) : Aus den nachgelassen Aufzeichnungen von D.L.R. Lorimer, Teil 1 : Hunza, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz, Austria.
- Rathjens, C., C. Troll, u. H. Uhlig eds. (1973) Vergleichende Kulturgeographie der Hochgebirge des Südlichen Asien, Franz Steiner Verlag, Wiesbaden.
- Gazetteer of Kashmir and Ladak (1890), reprint 1992 by Manas Publications, Delhi.
- The Imperial Gazetteer of India, New Edition, (1908), Oxford at the Clarendon Press, vol.12:238-242.
- 渡辺兵力 (1965) 西パキスタン山岳地方の農耕・農業総合研究, 19(1):215-230.